Ｉターン 海の仕事に飛び込んで

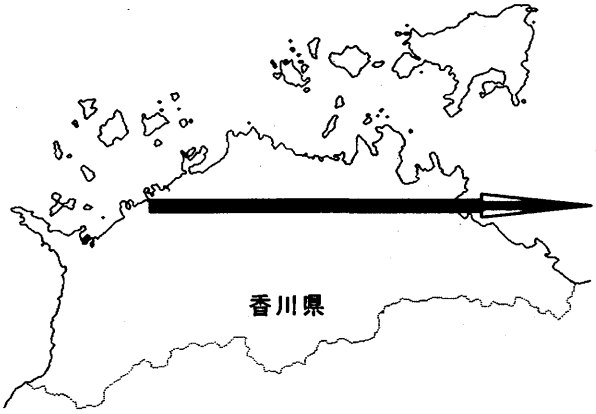
— 後に続く人たちへ —

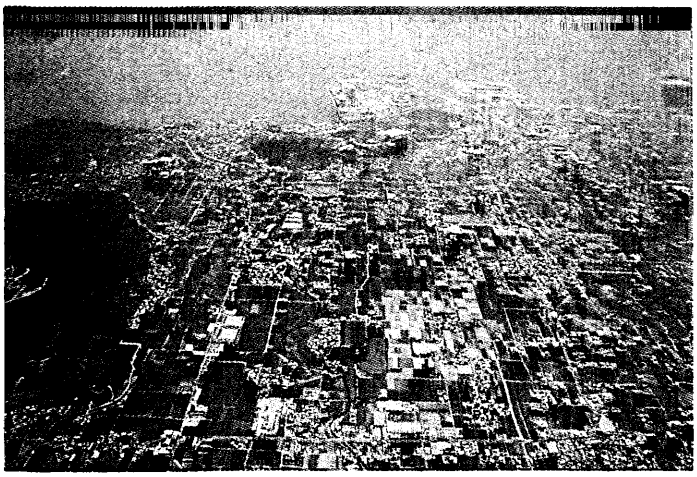
多度津町漁業協同組合青年部
部長　池田　久

1 地域及び漁業の概要

私の住む多度津町は、香川県の北西に位置し、北は瀬戸内海に面し高見島、佐柳島を含み岡山県に接している。

昔くは港を軸に海上交通の要衝として発展し、現在は臨海工業団地を中心とした、工業都市の一面を持っている。また、少林寺憲法の総本山や弘法大師が生まれた場所「海岸寺」のある文化と歴史の香る町でもある。





その町にある、私たちの多度津町漁協は、組合員数は４９名で、漁業は小型底曳、サヨリ流し刺し網、キス流し刺し網、カニ籠等の漁船漁業が盛んである。また、ベラ（キュウセン）・アイナメ・クルマエビ等の放流も行っている。

2．青壮年部の紹介

私たちの青年部は、平成５年に発足した、まだ若く新しい部会である。部員数は７人で発足後は、トラフグ・スズキ等の魚類養殖試験を行っている。

現在では、トラフグの採卵から成魚までの養殖を手がけるようになった。

3　漁業者を始めるまでの経緯

1）香川県を選んだわけ

私の親の里は、丸亀市牛島です。幼少の頃から夏休みなどは、香川県に里帰りしていた

ので、なじみがある土地であった。

また、親の仕事上、転校することが多い小学生時代であった。そこで、転校のない学生時代を送ろうと思い、生まれ育った大阪府を 14 才の時に離れ、祖父母のいる香川県にやって来た。

2）漁師になろう！と決意させた出来事

「漁師になろう！」と決意させた出来事は、子供のころに遡る。

親の里牛島で、漁船いっぱいに漁獲された多種多様な魚、それが次から次へと水揚げされる様子をいつも見ていた。子供心に「次はどのような魚、どのような色形」と思い、胸を躍らせる光景であった。その時から「いつかは漁師になりたい」と強く思うようになった。

3）漁師になるまで

私の場合、陸の仕事をしているときに、自分の遊魚船を多度津の漁港に船を係留し、週末ともなれば毎週のようにボートで釣りに行っていた。その頃、顔なじみになった、多度津町漁協の漁師さんに、「いつかは漁師になりたい」と話をした。

当初の返事は「よそから来て、漁師になった者は、おらんからなあ～」との返事ばかりであった。しかし、何度も話をしているうちに、熱意が通じて「そこまで真剣なら、組合に話をしてみるか！」との返答得て、組合に熱意が通じて、平成元年に準組合員になることができた。

その後、運送関係の仕事をしながら漁師としての「イ・ロ・ハ」を教えてもらい、組合に自分の考えと決意を訴え続けて、平成５年に念願かなって正組合員になり漁師への道が開かれた。

そして、妻に私の胸のうちを話したところ、不安もあったと思うが、私について来てくれた。

私は 36 才にして、念願の漁師になることができた。

4　実践活動の状況

漁師になるといっても、まず、船や漁具を購入しなければならない。私の場合、転身するまでの蓄財を、ほとんど投入して漁船等の必要器材のほとんどを新品で購入した。

始めから、新品を購入する必要はないかもしれないが、私はこれから漁師を続けていくことを考えると、「同じ物なら耐用年数の長い新品が良い」という考えで新品を購入した。

いざ、漁に出ると、「見ると、やるとでは大違い」ときには、大型船舶が私の船のすぐ近くを通り去って、底曳網のワイヤーに大型船の船底塗料がついていたことがあった。この時ばかりは、腰が抜けるほど恐い思いだった。

しかし、私はなによりも海が好きで、漁も楽しいく、漁師がつらいとは思わない。毎回網を上げるときに、「どんな魚が獲れているのか？」と期待感で、わくわくして楽しく、漁から帰ってきて自分の船を洗う時など、「次回も頑張ろう！地につく魚は工夫すれば何

とか取れる」と毎日を前向きな考えになれる。

私の漁場は、港からすぐ近く。漁場にいる魚は、工夫をすれば必ず獲れると思っている。また、「海にかえした、多くは魚はいずれ、私の網にのってくれる」思っている。

ですから、相場のしそうな魚を獲って他の魚は、海に返すようにしている。例えば、ベラなどは、青を獲り赤は海に返している。

獲った魚は、相場のするように、私なりの工夫はしている。船の生間は、水温が上がらないようにし、相場の悪いときは蓄養して、相場のしそうな時に出すようにする等している。

漁師は各個人が経営者、自分の考えで運営できるので、私は海に魚がいるかぎり「まじめに漁師をやっていればバンザイはない」と考えている。

5　波及効果

最初多くの先輩漁師さんは、陸の仕事から小型底曳網漁業への全く違う転職だから「長続きしないだろう」と興味本位で見られていた面もあったと思う。しかし、今では本音で私とつきあってくれるようになった。

多度津町漁協も、いろいろな工夫をする私を、偏見なく好きなようにやらせてくれる。

私の所属する青年部の部員の多くは、準組合員で陸の仕事についている。

他の漁協でも最初から、他業種からの転職を否定するのではなく、漁師になるチャンスを与えてほしいと思う。

漁師になりたい方も、簡単になれるとは考えないでいただきたい。海の仕事は命がけ。

もしもの時には、仲間に助けてもらう場面がある。自分自身の覚悟と先輩漁師さんに、信用されるよう努めなければならないと思う。

また、船や漁具を購入する為、ある程度のお金を用意することは必要である。

6今後の課題

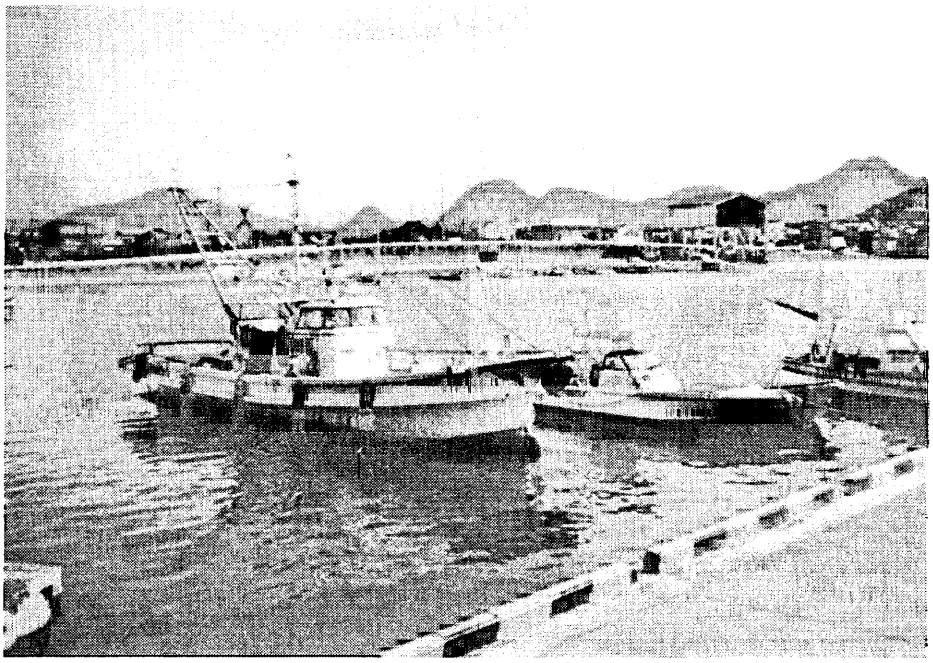
多くの漁師が、水揚量を競うように獲っているが、相場を考えながら、目的の魚を値崩れ起こさない量出荷し、獲ったものは生かして出荷するなどして付加価値がつくよう工夫すれば、水揚量が少なくても収益は下がらないと思う。

また、そうすることで、1つの漁が長い間できるのではないだろうか。

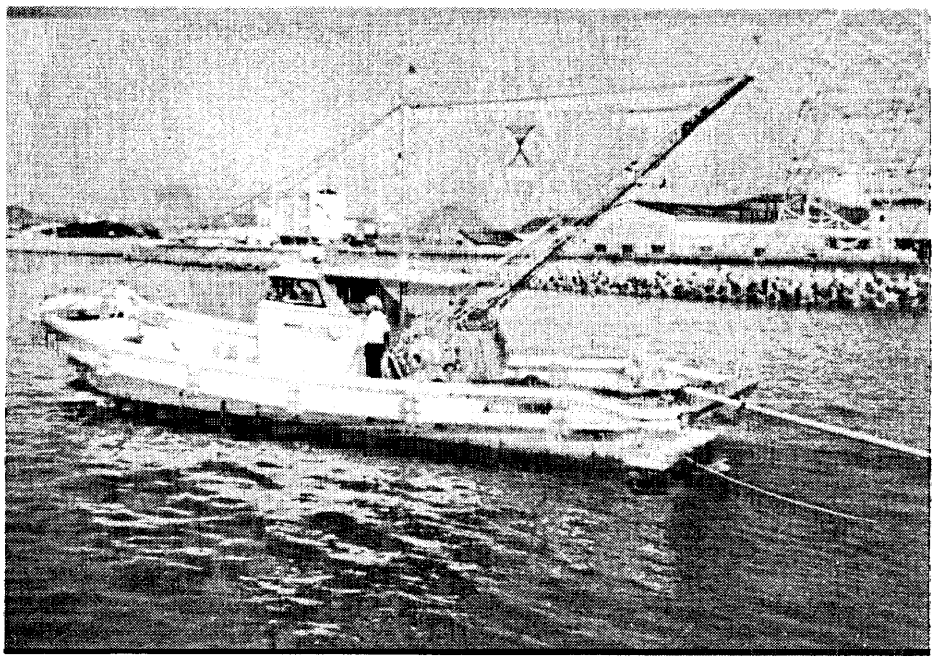
ところで、漁に出ると魚以外に1晩で、デッキいっぱいゴミがのってくる。このゴミを持ち帰えって廃棄したいが、その場合自分で処理しなければならない。

拾い集めたゴミを廃棄できるように関係機関にお願いしたい。

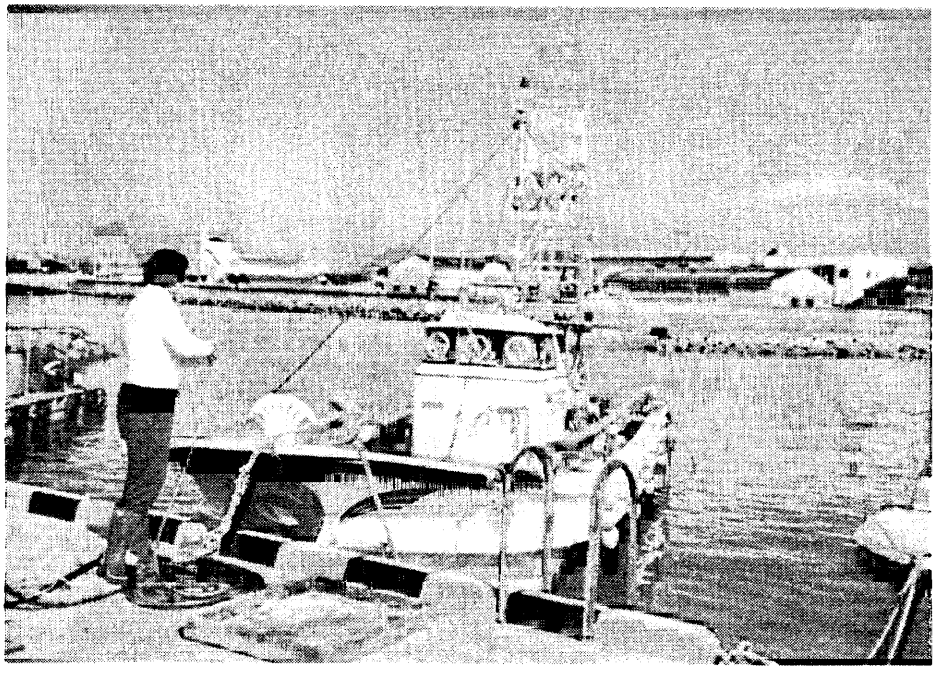
漁場を後に続く人に残すために。



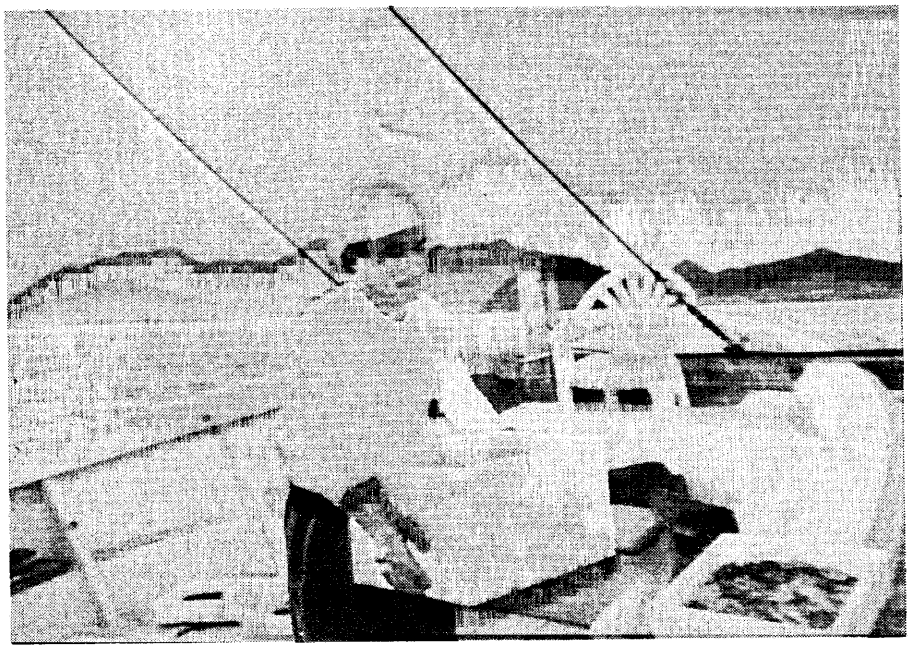
愛船



漁場に向けて出港



帰ってくるといつも船を洗います



私が捕った魚たち

デッキいっぱいのゴミ